昭和文学全集

8

野上彌生子

宮本百合子

林芙美子

平林たい子

壺井栄

幸田文

小学館

昭和文学全集
第8巻

昭和六三年九月一日　初版第一刷発行

著者——野上彌生子　宮本百合子　林芙美子
平林たい子　壺井栄　幸田文

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇一東京都千代田区一ッ橋二丁目三番一号
振替　東京八—二〇〇番
電話　編集・〇三—二九二—四三五一
業務・〇三—二三〇—五三三三
販売・〇三—二三〇—五七三九

印刷——大日本印刷株式会社
製本——大日本印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価＝4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568008-3
©SOICHI NOGAMI　KENJI MIYAMOTO　RYOKUBIN HAYASHI
SHINKO TESHIROGI　MASUMI KATO　AYA KODA　1988

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

野上彌生子　5

7　秀吉と利休

195　名月

208　笛

241　巣箱

247　夏目漱石

253　バウム・クーヘンの話

宮本百合子　257

259　二つの庭

399　杉垣

410　風知草

442　冬を越す蕾

447　歌声よ、おこれ—新日本文学会の由来—

林芙美子　451

453　放浪記　第一部

513　風琴と魚の町

524　晩菊

535　浮雲

平林たい子　695
697　嘲る
712　盲中国兵
715　鬼子母神
720　こういう女
745　地底の歌
818　秘密
壺井栄　831
833　二十四の瞳
幸田文　915
917　流れる
1020　黒い裾
1033　作家アルバム
解説
1041　野上彌生子……小田切進
1045　宮本百合子……沼沢和子
1049　林芙美子……野島秀勝
1053　平林たい子……川嶋至
1057　壺井栄……久保田正文
1061　幸田文……勝又浩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年譜
1065　野上彌生子……渡辺澄子
1070　宮本百合子……小林茂夫
1074　林芙美子……井上貞邦
1078　平林たい子……阿部浪子
1083　壷井栄……古林尚
1087　幸田文……青山毅
1092　底本について
1093　用字用語について

野上彌生子

秀吉と利休

一

堺の家では、朝寝も利休には愉しみのひとつであった。とりわけその日は、まえの夜おそく帰りついたくたびれもあり、晩春の熱量のました太陽が軒のすかし窓を通し、部屋の障子のひと枠、ひと枠を黄じろく染めるまで、おもいきり寝ぼうをした。

それもきまりで、起きると朝湯の用意ができている。

土地らしい潮湯のむし風呂である。粗らいすきまのある床の下から吹きあがる潮の香の強い湯気は、まあたらしい筵を通して、浴槽いっぱいにもうもうとたち籠めている。狭い戸は、大男で七十に近づきながら骨格、肉づきに衰えのない利休には窮屈すぎても、なにか躙り口をはいるような身のこなしで上手にもぐりこむ。はおった麻の浴衣は洗布でもあった。冬でもないかぎり長くははいっていないが、からだはたんねんにこすり廻す。熱した塩分の浸透は、肢体から関節のふしぶしまで鞣めし、なおまた湯気でねっとりした皮膚に、板敷の大だらいの水をざぶざぶ浴びる爽快さはいいようがなかった。

ぬぎ捨てた浴衣とついのもう一枚が、隅の籠にはいっている。利休は濡れたはだか身にひっかけ、今度はそれで全身を拭きとってから、極楽、極楽、といいつつ向う側の仕きり戸をあける。鏡台や衣桁のおかれた小部屋で、着がえを膝においてお待つのは後妻のりきであった。

「昨夜とは、うってかわったお色つやになりました。」

「たつがたつまで、片時も暇なしでね。」

「そんなにお忙しくては、おからだにいかがでしょう。」

「御用だからな。」

聚楽第内に住むようになってからは、朝湯はおろか、利休は床にもゆっくりはしていられなかった。秀吉は時刻かまわず現われた。場合では前触れもない。虚をついてやろうとする意地わるもひそむが、大事な話をおもいつくと、待てしばしのない性急さで、密談には都合よい茶室をえらぼうとする。利休が三千石の茶頭にとどまらず、政治むきのことまで関白の相談相手であるのは、遠国の大名たちにまで知れわたっていた。

とにかく、いつなん時とびこまれてもよい準備を怠るまいとしたので、利休屋敷はあたりの家々にくらべてはことさら朝が早く、利休自らにもおきぬけの仕事が多かった。

禅においては師、茶道では弟子格、また堺いらいの無二の友である大徳寺の古渓和尚が筆をふるった、「不審花開今日春」の墨蹟から不審庵と呼ばれ、それが屋敷の名にまでなっている四畳半と、いまひとつ三畳台目の茶室は、清掃からしつらえに人手をかけさせなかった。わけてもゆるがせにしない火入れは、炉、風炉を問わず、その日その日の照り、曇り、季節によってかわる湿めり、乾

き、風のあるなしで、交える粒灰の分量から木炭かざりまで日毎にかえた。七十に近づいて皺ばみ、油っ気もない手が寒いあいだは婢女のように荒れている。またその手は、大男といえるからだに似て大きく骨太でありながら、ひとたび点茶の座につくと、別なものになっていようもなく華奢に動く。茶室の掃除も点前も別事ではなかった。とはいえ、毎朝の雑仕もひとしく茶道の精進として純粋につつましく行ったろうか。そうであり、そうでもなかった。彼の意識の底にはつねに秀吉があった。いつ姿を見せようと、待っていたような迎え方がしたく、相談事なら、ちょうど予期していたような受け答えがしたく、茶室に通るなり、ここで朝飯を喰おうか、といいだされても、一向にまごつくまいとしたのである。気分次第で、秀吉はだしぬけにそんなことをいう。またこうした場合は、わざと藤吉郎時代の尾張訛りをむきだしにして親愛の表現にするが、その調子に乗ってはならず、こちらは常にもまして慇懃に振舞わなければならない。

利休が堺に戻るのは、これらの生活からの逃避でもあった。ことに今度は半月まえの後陽成天皇行幸につづいて、盛儀に列するために上京した諸大名のため、聚楽第ではたえず茶事が催され、明けくれ気の休まることがなかったから、家居でしばらく寛ろぎたかったのである。

町家のことで、一方は土蔵になる細長い庭には日光がみち、女竹の茂みが、白壁にそうてほとんど黒くけざやかに浮きあがっている。低い四つ目垣のしおり戸を押して裏へまわれば、茶室の露地にでる。利休は湯あがりの、太い爪の目だつ素足で廊下に佇んだまま、苔の青い飛び石のひとつひとつを、向うの隅の、竹簀の子に蔽われた古い井戸までじゅんじゅんに数えるような眺め方をした。そばに一本あって、冬の花を寂しくつけるわびすけによって、それは椿の井戸と呼ばれている。いったいに水質の粗らい堺の土地にしては、めずらしくよい水で、二丈近くも深い底から汲みあげるのにちょっと手際がいるにしろ、利休には天与の賜物であるのはいうまでもない。

「七夕の井戸浚えには、ついでに井桁もとりかえるか。」

方型の厚い木組みの角々が水さびで青ずみ、なかはもう空洞らしく潰れかけているのに最後の視線をとめた彼は、そう独り言につぶやいたのみで庭にはおりず、離室のほうから水屋をぬけて茶室にはいった。

二畳台目の席としては、ここがはじめての工夫であっただけに、くぬぎの歪み柱一本にも彼には思いいでが深い。躙り口の内側の半畳、その北の、これも半畳とのさかいですでに炉に代っておかれた風炉の口は、火のみだれ過ぎないように土器でふさがれ、名残りの香のかすかな匂いのなかに、あられ釜がほんの一きれ足す木炭を待ち、いまにも鳴りはじめようとする一瞬まえの静けさで、ひっそりとかかっている。灰の拵えもおもしろいに違いない。床掛けは伝宋汝志の淡彩の牡丹で、ほんの小幅ながら、利休がもっとも愛している唐画の一つであった。

利休は道具畳をぬけ、待合からつくばいまで眼をくばってから、りきが朝餉の用意をととのえている座敷に戻って来た。彼はなにより先きにきいた。

「今日のしつらえは御前か。」

「紀三郎でございます。」

りきは末子で、生さぬなかの長男紹安、また後妻にはいる時連れ子にした次男少庵、そのほかに三人ある娘のあとに生んだ末子の名前をあげたついでに、今朝早く出入りの頭梁が、浜河岸の納屋の修理の話でやって来て、紀三郎もいっしょに現場に出掛けたむねを伝えながら、

「そんなわけで気忙しそうにいたしておりましたから、不行届きなことでございましたでしょう。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「紀三郎が本気にやれば、兄たちに劣らぬものになれるのだがな。」
「それがあの通りですから、いったい、どんなつもりなのか、あのこのことだけは、私も手のつけようがございません。」
利休とは年齢も二十あまりのひらきがあるのみではない。華奢に小柄で、藍地小紋の給に、はやりのびろうどの襦袢の襟をのぞかせた、いつまでも若女房めいて匂やかなりきの頬が、ふと雲のかげが落ちたように曇るのはこの息子の話がでる時であった。
でも、そのことには利休はもう触れようとせず、箱膳の蓋をあけた。一人分の食器のおさまる黒塗りの古びた器具は、若い時からのものである。家に帰っているあいだはいまだに用いており、それもふるなじみの大ぶりな飯椀と、象牙の箸を自らとりだすと、りきはこぶだしで味よくこさえた粥を土鍋からよそった。朝はこの粥に時の野菜の煮ものが一皿、それに漬物ときまっていた。
「浜河岸の手入れも、そろそろ片附くふうかの。」
「さあ、いかがでございましょう。納屋も古いほうは土台からの取りかえだと申しますから。」
「とすれば、まだ当分は仕あがるまい。」
「それにこの節は大工、左官も大阪のほうへまいりたがって、使いにくくて困ると頭梁がこぼしております。」
「ふむ。」
利休は熱い粥をゆっくり食べた。
堺の浜は、大和川の河口から南へかけてまっすぐに伸びた海岸であっても、古くはちぬの海なる大阪湾のひろびろした水の袋の一部だから、波はしずかでだぶだぶと青い。向う側の四国、中国、九州路からはもとより、紀淡海峡の早い潮をきって、伊勢、尾張の船まできそい集まるあいだに、舳艫を派手やかに彩色した唐の大船まで出入りした。しかし、倭寇の跋扈やその他の縺れで、宋、明との直接取引きがとだえ、それに代った南蛮船を、ばてれんといっしょに九州のキリシタン大名が膝もとに抱えこむようになってからは、博多、長崎がこの古い開港地の繁栄をおびやかした。とはいえ、紅毛碧眼の商人がつんで来る生糸、絹、綾、緞子、びろうど、毛皮、宝玉、紫檀、黒檀、なおさまざまな珍らしい食べものといった奢侈品から、いまの合戦にはなくてならない鉄砲の弾丸になる鉛、硝石の軍需品の売込み、またもっとも利潤の大きい買いものとする銀をはじめ、漆器、その他の雑貨の集散では、堺は京、上方をひかえた地の利もあり、なお安南、ルスンも瀬戸内の気でいた商魂を容易に失いはしなかった。
南蛮船がキリシタン大名の港に来るのは、年に一、二度にすぎない。その時にそなえて買いあつめ、また彼らから買いこんだ物資の保管には、安全な設備をもたなければならず、必要は、内地の諸国を相手の商売にもかわりはなかった。それ故、堺の町の富商たちは、いわゆる納屋衆の名で呼ばれる倉庫業をいとなんでいる。海岸ぞいにそれぞれの店の名前、屋号を高い破風の下に紋章ふうに大きく書いた土蔵が、ふつうにはまだ板葺きが一般なのに、そこだけはおもおもしく瓦屋根でならんでいるのは、彼らの富の標識でもあった。たえまない入り船、出船、あるいは一と仕事終ったかっこうで帆をおろし、むきだしの帆柱を、なにか冬木立のように林立させた親船、そのあいだをはしっこい腕白児のように漕ぎまわる伝馬、荷役の仲仕と船頭の叫びあう胴間ごえ。これらの粗らい動的な水上の殷賑は、倉庫の白壁の列や、青く光る波との交錯において、古い貿易都市の貫禄をまだ活き活きと示すのである。
利休も納屋衆の一人で、家業は魚屋であった。でも、堺の目貫きにならぶ魚棚の商人とはちがい、網元をかねた塩物問屋だから浜の倉庫の大切さは貿易商に劣りはない。ただ品物が品物で、彼らのような派手な儲けは望まれず、なお大阪の築城からは新しい町に押え

られがちで、りきが噂する大工、左官どころではなく、一尾の魚でも大阪のほうが値がでるから、古い関係の漁船まで堺を素通りしかねなかった。しかし先代ほどにはことがいかないのは、それだけの事情ではない。いまの彼は、魚問屋の主人よりは秀吉の茶頭であり、そのうえ、顧問役にひとしかった。後妻のりきは利発な女で、金春流の能役者の家に生まれただけに、謡、小舞のたしなみはもとより、茶の湯も夫とともに京に住むあいだは、大政所、北政所のないないの稽古に御相手をするほどに堪能ながら、家のなりわいに采配のふれる質には遠かった。

長男の紹安、次男の少庵はともに茶人となっている。それに紹安は、父と同じく茶頭として五百石を食みながら、リュウマチ性の足の痛みが持病で、いまも有馬の湯に出養生をしているありさまだから、家業をつがせるとすれば、紀三郎よりほかにはない。ところでよい男前で、利かぬ気のあたまの鋭い十八の若者は、帳場におちつくつもりはなさそうに見えた。また父や兄たちの茶は、わび数奇よりいささか物好きだ、と憎まれ口をきいたりする癖に、点茶の座につかせれば、いつこれほどの腕になったかと感嘆させないではおかない。母の兄で、それも能役者の鳥飼弥兵衛は紀三郎の容貌と声柄に目をつけ、いっそ、自分たちの道にはいる気はないか、芸も叩きこみ次第で、いまからでも立派なものに仕あげてやろう、と誘うが、それくらいなら隆達節をやる、といってのけ、居間にしている裏座敷のほの暗い壁にもたれながら、堺にはじまってこのごろは京、大阪まで流行っている意気な小唄を、聴きおぼえとは思われない巧みさで低唱する。今日とても普請場からまっすぐに帰って来るか、どうか、わかったものではなかった。久しぶりに家にある父への手前をおもい、出しなに釘をさしておいたのではあるが、むしろ、紀三郎は父を避けるために、わざと普請場へ行ってしまったのであろう。この一、二年、めだって扱いにくくなったのみでなく、五十近くでえた子供だけに情愛もいっそう深い父に対して、こと毎にそっぽを向く傾向がつのるのを、りきは母親の勘で見のがさなかった。幸いに利休は、紀三郎がちょっとした言葉に示す反抗も、いっそ隔てのない甘えか、若いこころのやり場のない突っかかりとしかおもっていないように見えた。

「あれにも、そろそろ身をかためさせたほうがよい。」

最後の一口は湯漬けにして、箸をおくといっしょに、なに気ない風にそういいだした夫を、りきはおはぐろの艶々とした前歯を淡あかい唇にのぞかせて見あげた。彼もほかのことは考えていなかったらしい。

「その気になってくれれば、安心なのですけれど。」

「どこかにいい交した女でもあるふうかの。」

「べつにそんな様子はございませんようで、鳥飼の兄なぞは、かえっていけないことを申すくらいですわ。」

「どういいなさる。」

「紀三郎はつまらない相手にうつつ抜かす男じゃないから、当分好きなようにさせておけ。思いきり遊ばしたほうが、彼奴はもっとからりとなるなんて。」

利休はまだ肉のおちない艶のいい頬のいっぽうで、ほろ苦くわらった。義兄は彼らしい治療法をいうのである。

金春流の先代の家元喜勝の弟子であったのが奈良から流れて来たかたちで堺に移り、とにかく、いっぱしの能役者の地位をこさえあげるまでの弥兵衛の若盛りには、この道の修行ではなによりの禁制たる好色、博奕、大酒のうち、第二の誡しめは別として、あとのものへの惑溺は誰にもひけはとらなかったのだから。でも、利休はそれをいいだそうとはしなかった。りきが下婢を呼び、いっしょに膳をさげて部屋を去ったあとも、もとの座を動かなかった。かたちのよい大きな坊主あたま

に似あった、二瞼目のまるい大きな眼を、どことを見るとはなく眇めるようにして、厚い唇を左寄りにくいしめている。考えごとをする場合の癖である。利休は十八の紀三郎をおもい、またその年ごろの義兄の放縦な振舞いにくらべれば、同じ意味での若い時代というものは、自分にはなかったにひとしいのを思いめぐらしていたのかも知れない。

まことに、与四郎の名で呼ばれたほんの少年で、舳松の道陳に東山流の茶法で手ほどきされて以来、彼が生きることは学ぶことであった。そのあとに師匠とした武野紹鷗からは、連歌師であった彼の歌道、茶道いったいの悟りとして、古い仕方を守りつつ、つねに新しい作意をするのが茶湯であるのを教えられた。また、紹鷗の先達で、一休の弟子で、彼からえた「仏法も茶湯の中にあり」の一語に生涯を貫いた珠光への傾倒は、しだいに紹鷗をのり超えさせた。思えば与四郎が千の宗易となり、またいまの利休となり、なお飽くまで利休であろうとする今日までの茶道一途の精進は、「藁屋に名馬をつなぎたるがよし」の言葉で珠光が喝破したものを守りつつも、なお自分だけの創意と工夫で、あたらしい茶の世界をうちたてようとするところにあった。はじめ仕えた信長の死で、かわって秀吉の茶頭をつとめることになった時、彼のために建てた山崎妙喜庵の茶室待庵は、すでに紹鷗でも珠光でもなく、利休がはじめて利休でありえたわび数奇の理念を、しかと眼に見えるものに仕遂げた見本でもあった。

とはいえ、珠光の直弟子たる粟田口の善法が、闘茶の遊楽、書院台子の茶の儀礼化を、師匠が侘びの一筋で質的に変貌させた以上に、彼自らは藁屋、名馬をさえ放下し、かん鍋一つで茶湯も愉しめば、食事ごしらえもした透徹には利休はまだ距離があった。しかもそれが彼の懈怠の故ではなく、かえって積極的な独創性にもとづくところに、利休の根ぶかい矛盾がひそむ。

妙喜庵の待庵で、いままでの茶座敷の六畳、四畳半をほんの二畳に圧縮し、出入りには、漁家のくぐり戸から思いついた躙り口で這い入り、這いでるだけの空間しかあまさず、壁には、藁すさの粗ら粗らしい土を塗ることで調和美を全うするとした彼が、いっぽうには黄金の茶室を建てえたのである。三畳一間の天井、壁、床、柱のことごとくが金、あかり障子の骨までが金、畳は猩々緋、縁は紺地の金襴、それに道具も茶入、茶碗、盆、茶杓、蓋置から、水こぼし、火箸にいたるまで黄金ずくめで、ふくさも金襴が用いられた。なおこの建物は彼の社会的な名誉をもつくりだした。つねは大阪城内におかれていても、組みたて式にできていたから、天正十三年九月七日、秀吉はそれを禁中に運びいれ、正親町天皇をはじめ、親王たちを客として金屋の茶会を催した。その時献茶の儀に参じさせるため、布衣の宗易に利休居士の賜号があり、それ以来その名を名乗ることになったのだから。

もとよりこの茶座敷は一世を驚嘆させた。秀吉にとってはそれが狙いの一つであったに違いない。聚楽第の南門に、三十万五千両の金銀を二回にわたって積みかさね、諸侯、諸大夫に気まえよくくれてやった金配りにひとしく、黄金の茶室も、無尽の富と権威を誇るにはちょうどよい道具であり、大阪城に伺候する諸国の大名たちは、拝観を許されただけでもとくべつの恩寵として土産話にした。

こうした有様のあいだにおいても、ひそかな物議がかもされないではなかった。彼の草庵露地の侘び茶の理念が、金ぴかの茶室でどう生かされるかであり、この疑いをもっとも強く抱いたのは利休の一番弟子で、いまは秀吉の勘気を蒙って所払いとなっている山上宗二であった。同じ堺の茶湯者の中でも、宗二はとりわけ生一本で、師匠の利休を珠光につぐ名人とは信じながらも、彼をはじめとして自分たちまで、本来はひたすら修道の方便たるべき茶湯を、生活のたずきとする本意なさ

をつねづね嘆いていたのだから、黄金の茶室への反感も烈しかった。秀吉の金ぴか趣味に対する利休の迎合、妥協にほかならないとまで彼は思うのである。

利休には、宗二の不満や疑惑はわかりすぎるほどわかっていた。また宗二が、腹にためたままま向うからぶっつかって来ないのは、論議のたねにするのも厭わしいほどに思っているのを見ぬきながら、自分から問題にしようとはしなかった。ひとが善く、純粋であるだけ、幾分えこじで、一度あたまに染みついたことは、容易に剝ぎおとせない宗二に、利休のひだの多い考え方を飲みこませるのはむずかしい。同時にそれは少年与四郎で道陳に学び、紹鷗をこえ、珠光に導かれつつ歩いた茶修行の遍歴のあいだに、つねに利休のこころの底にあった二つのものの対立のむずかしさでもあった。

茶湯とて別事ではなく、ただ湯を沸かして飲むまで、とこのごろの彼はいいきっている。その境地からは、茶の湯の本義が書院台子の茶にあるか、草庵露地の茶にあるかのごときは問題にもならない。しかもそれらのものは、別な姿で彼を捉えた。いいかえれば、極限的にゆたかなものと、極限的に乏しいものとの対比のあいだに、双方のいずれにもひかれる自らのこころを、どう位置づけるかであった。黄金の茶室を例にとれば、思いついたのはもとより秀吉である。でも宗二の想像のごとく、迎合や、妥協や、あるいは媚びで利休はそれを建てたのではさらさらない。

妙喜庵内の待庵によって、いっぽう無にまで圧しつくした美の創造に悦びを見いだしたに劣らない意欲を、他方、黄金の茶座敷にもそそいだまでであった。火焔に消滅したことで、いっそ活き活きと眼に残る安土の七重の天守閣、それの再現にほかならぬ大阪城のけんらん、華麗が象徴するかぎりなく豊満で、過剰な、美の時代感覚を、畳三ひらの黄金の空間に横溢させて見ようとした試みでもあった。はなはだしく異質なる建物も、それ故に別種のものではなく、利休の利休らしい独創が、たまたま極の両端に表現されただけで、その意味からは、二つは一つのものに過ぎなかった。同時に黄金の茶室で金の茶道具を用いつつも、待庵の侘び茶を味うにかわらず、その粗ら壁をまえにして坐っても、百畳敷きの大広間で、永徳、山楽の障壁画のあいだにあるに等しく、潑剌とおおらかな美意識に浸りえないならば、結句はそれを枯れかじけさせた侘び数奇にも、徹することはできないはずだ、と利休は考えたかった。

そこへ辿りつくまでの苦しい迷い、たゆたいは、宗二にしろ、誰にしろ、弟子たちはわかってはいない。またそれは、今日までの利休の生涯を裏づける茶修行の相でもあったから、若いころでも、人なみの男の愉しみごとにはまるゆとりはなかった。長男紹安の母になる先妻との結婚さえ、寒くなれば炉がひらかれるように、人間のしきたりに従ったに過ぎない。それにくらべれば、不惑の年をこえてりきを迎えた時の彼の気持はべつであった。年齢もふた廻りから違う出もどりの弥兵衛の妹を、利休は連れ子も厭わぬほど愛しいものにおもった。それ故りきは後添いながらも、利休にははじめての思い妻として迎えられたのである。

「長次郎さんから、こんなものを焼いてみたので、お帰りになったら御目にかけて頂きたい、と申してとどいていたのだそうでございます。」

りきはそんな言葉といっしょに、あけぼの色に淡紅い楽の茶碗に、塩づけの桜がひと粒浮いた素湯を、黒い盆にのせて戻った。

長次郎は、唐物、名物ものにしだいに否定的になった利休が肩をいれて、あたらしい楽茶碗を焼かせている陶工である。

利休は、茶室でのほかは抹茶は飲まない。杜氏が一杯のきき酒も含むのみで吐きだすように、舌を鈍らせないためであり、食後も素湯にかぎられるのを知っている長次郎は、

時々そんなものを焼いて贈って来る。
「ほほう、なかなかいいじゃないか。」
「美しいいろでございますわ。」
「形も、もっくりとできておもしろい。」
からにして両手で膝においた茶碗を、見込み、高台わき、厚み、肉取りと眺めたり、撫ぜたりするあいだに、利休はつねの面持ちになっていた。夫がなにかもの案じのていに見える時には、ただそっとしておくほかはないのを心得たりきも、今日のなんとなしの不機嫌は、紀三郎の話からと思うだけ胸がつかえていた。それ故、長次郎の茶碗で彼の調子がほぐれたのは、指にささって、大きな傷よりいっそ気になる刺が、ようやっと取れたようにほっとするのであった。
おもてには物売りのこえがたえない。宿院を中心とする目貫きの大通りからは左手になって、むかしながらにごばん割りでつづく家並みの横町だから、てんびん棒でかついだり、頭にのせたりの商売がかえってしやすい。わけてもかん高く歌うようにひびくのは、淡路のわかめ売りのこえである。鳴門の波にもまれて育つわかめを、女たちは浜の草をやいた灰にまぶし、生乾しのまま小舟ではこんで来る。柔らかさ、味のよさはもとより、水に浸すと、海のいろも潮の香もともによみがえるような緑が美しい。
「淡路のわかめ売りが来ると、やがて夏だな。」
利休は茶碗を盆においていった。その言葉つきでもたしかに紀三郎のことも、自分のこともうこころにはなく、聚楽第ではきかれない市井の物売りの、それぞれ調子のかわった呼びごえを、久しぶりに興がっているふうに見えた。りきは半分はおしょうばんに耳を貸しながら、店のものの在所からまだ柔らかそうな筍がとどいているから、晩食には彼の好きなわか筍のほかに、ちょっと珍しいものをこさえるつもりだといった。りきは懐石でもくろうとに負けないほど料理が上手である。
「なにを、御馳走してくれる。」
「おたのしみに、申さないでおきましょう。」
「ではおとなしく、晩を待つのだな。」
「あら。」
りきは短かく、はずんだ声をだし、ながし眼に夫を睨んだ。底ぶかく澄んだ黒瞳が、いっぽうは眼がしらに、いっぽうは眼尻にひずみ、落した眉の跡がそのかたちなりにほの青くういた額に、濃い生え際をくっきりさせた垂れ髪の横顔が、こんな時のりきをことさらに色っぽくする。またそれを美しいと見る利休の顔には、妻のみにとける謎があった。若い時代を慎ましく送ったためもあり、彼のがっしりと大きな体軀は、老いの衰えをいつまでも知らなかった。
昼すぎ、堺の代官松井友閑から、鮮鯛一折と南蛮の葡萄酒一壺がとどいた。いち早く帰宅のことが伝わったのであり、この音物は茶頭の利休より、秀吉の政治顧問と見られている彼への敬意であるのはいうまでもない。しばらくは御滞在であろうか、一度拝芝の上、京の御話もうかがいたい、との口上が持参した用人から伝えられた。利休も口上で礼をのべ、いずれ当方よりもとつけ加えたが、明日来いとも、明後日こっちから行くとも、はっきりした返事はしなかった。ふるい茶湯仲間には違いなくとも、代官たる地位が時に強く意識された友閑に対しても、いまの利休はこんなつきあい方ができる。たしかにまた二、三日は、心づもりの用事もあった。
それでも応対は鄭重に、店とは裏つづきの、土蔵や空地で店とはべつの構えになった玄関の控えの間まで、自らあらわれた利休が部屋へひっ返すと、さっそく用事のひとつが待っていた。書院ふうな小障子であかるい窓のまえの机のそばには、大福帳、当座帳、出入控帳の文字を、厚紙の白い表紙に肉ぶとに書いた帳面といっしょに、それも唐伝来で、堺でもまだ大店だけのものなる曾呂盤がおい

てあった。

帰宅のたびに、利休はかならずまず一切の帳簿をしらべる。先代からの子飼いで、利休とはいっしょに育った間柄の、老番頭の茂兵衛が数年まえ亡くなってから、店もだいじな心棒を失ったのではあるが、彼に叩きこまれた甥の儀助があとに坐っているから、帳尻にごまかしのあろうはずはない。ひとつはしきたりであった。律義な老番頭は死ぬまでそれを求め、留守のあいだはとにかくとして、帰った時ぐらいは、帳合をするのは家業をついだ当主の義務だと主張した。利休が今日までそれに従っているのは、忠言をもっともだと考えるのみではない。一生の茶修行は茶修行として、堺商人の性根はみじん摩滅していないためである。彼は茶室で茶をたてると同じ自然さで帳簿にたんねんに眼を通し、茶杓の扱い、袱紗さばきに劣らない手際でぱちぱち曾呂盤をはじいた。問屋としての利権、利益、貸地、貸家、その他のきまった収入はゆるがせにはできない。堅い商家に生まれたものほどそうであるように、利休は金勘定には几帳面であった。それにいまは地位が地位で、余分なもの要りを省くわけにはいかないから、三千石の扶持は、京都の生活でとんでしまいかねなかった。

茶頭仲間の津田宗及、今井宗久が、同じ堺衆でも貿易商として金廻りはけたが違い、三千石もほんの小遣い銭にしていられるのを、利休は時に羨望しないではない。また宗久の方は酒で口が軽くなると、とっておきの自慢話をもちだす。いまは飛ぶ鳥もおとす関白の秀吉が、まだ藤吉郎で姉川合戦の陣中にあった時、鉄砲薬三十斤、焔硝三十斤の手配を泣きついて来た手紙のことにはじまり、彼を天下さまにしたかずかずの戦功とても、自分らが勝たしてやったようなものだ、と憚らずいってのけ、流石に、ないしょ、ないしょと、酔いで赤くふくれた鼻のまえに手を振るのであった。今井宗久の言葉はたしかであろう。また同じたしかさでいえるのは、姉川合戦とはかぎらず、いくさのたびに彼らはしこたま儲けたことだ、と利休は宗久の自慢話でいつもおもうが、この絡みあいはすでに信長からのものであった。

信長の支配がはじまった時、矢銭として諸国からとった課税の中でも、莫大な二万貫をわりあてられた堺は、容易にいいなりにはならなかった。町のまわりには高櫓をきずき、堀にはとげのある菱を植え、信長勢と一戦を交えても不当な要求をこばみ、むかしからの自由都市の伝統を守ろうとした。それが話しあいでかたづいたのは、ほかに事情があるにしろ、貿易港の特殊性をふまえての持ちつ、持たれつの利用をおたがいに捨てまいとしたのである。宗久をはじめ妥協派の代表の津田宗及、当時はまだ千宗易であった利休が、そろって信長の茶頭となったのは、新しい権威者と堺の融和の見本であった。

秀吉になっても三人はもとより、堺の重だった茶人はのこらず召しだされた。茶湯はもうあそび、趣味、教養にはとどまらなかった。華々しい武勲によって、せめて得ようと願った名物の茶器が与えられず、代りに一城のあるじに任ぜられたのを、かえって口惜しがるほどの有様になっていたのだから、秀吉が名高い茶湯者を側近に集めたのは、ひとかどの数奇者をもって任ずる彼自らの満足のみでなかった。文化政策としても巧みな仕方であり、すべてが堺衆である点からすれば、天下取りにはなくてならない軍需商人を手飼いにしておくわけになる。九州の島津は去年の五月にかたづいた。つぎの仕事は小田原の北条を屈服させ、早雲以来、五代にわたる関東の支配を奪うことにあったから、茶会はしばしば商談の場にもなる。島津征伐では博多の連中にしてやられたが、小田原のことがはじまれば取り返しがつく。堺の商人らは陣太鼓のひびくのを待っているのであった。

利休は自らは家業が家業だから、戦争でとくべつな儲けをしたことはない。とはいえ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com